

大谷教師塾

「自分がなりたい『先生像』は？」

センター員 山内 清郎



教職支援センターだより「大谷教師塾」は本学ホームページにも掲載を予定しております。

目次:

- 「自分がなりたい『先生像』は？」 1
- 伝えたいことは山ほどあります(3) 1
- 生徒との距離感をつかむことのむずかしさを知った5日間 2
- 教師になるために『自分の参考書』をつくらう！ 2
- 私の夢は教師になると。絶対！ 3
- これからの予定 3
- 知っておきたい教育用語―「PTA」― 4
- 読書案内「教えるということ」 4
- 英語ノートを知っていますか？ 4

とある高校の先生からこんな話を聞いたことがあります。4月に学級開きがあつてから数日、今年のクラスはどういうクラスになっていくだろうかと考えて過ごしていたそうです。そうこうして2週間ほど経ち、気づいてみると、まだ誰一人として欠席や遅刻がない。そこでホームルームの時間に「どうや、このクラスの目標を無遅刻無欠席にしてみようやないか」と提案したところ、生徒たちもまんざらでもない様子。せっかくだから一度チャレンジしてみるか、ということになった。目標が決まったの当初は、クラスにもよい刺激になっているようだった。ところが、無遅刻無欠席のまま、ひと月が経ち…となり、当初のピリッとした空気が徐々に変質してきたように感じられ、何とも言えない疲れた空気が漂うようになってきたということでした。

そんな時、とうとう生徒の一人が、クラブ活動での骨折のため午前中の授業を欠席した。この話をしてくれた先生は、その時のクラスの様子を「張りつめていた緊張の糸が切れて、誰ということなく、クラス全体がホッと安堵のため息をついていたようだった」と語ってくれました。また、それから時を経ていよいよ年度末も近づき、このクラスでの一年を振り返る時期になったとき、生徒たちには、年度当初のこの「無遅刻無欠席の(栄光の?)51日間」について口々に「最初は、何となく誇らしい気持ちにもなったけれど、最後の方は、誰か遅刻してくれ、誰か欠席してくれって願ってたし」「今やから正直言うけれど、記録が伸びていけば伸びていくほど、どんどんしんどくなっていったわ」と先生に(力なく?)苦笑しながら漏らしたそうです。

師走も近づき、この一年を振り返る時期になってきました。みなさんは教職を目指す中で、この一年、どういったことにチャレンジしてきたでしょう。教育実習では、何よりも指導案を作成しての授業が苦労とともに深く印象に残っているかもしれません。学生ボランティアや学校インターンシップでは、子

たちとの触れ合い方に随分と悩んだりもしたのではないのでしょうか。そうした経験を積み重ねる中で、自分がなりたい「先生像」というものが徐々に形作られていっていることと思います。学習指導をきっちりとできる先生、ルールを守ることや社会性について厳しさをもっている先生、あるいは、子どもの気持ちにしっかりと寄り添える先生、等々。

冒頭で述べた高校の先生のお話から、わたしは一度みなさんに次のようなことを考えてみてほしいと思っています。一方で、無遅刻無欠席という目標を立て、生活面での指導をきっちりとしようという先生の姿、他方で、だからといって、無遅刻無欠席の記録が続いているのでよし、とするのではなく、そこに漂っている倦怠感(?)を、敏感にセンサーを働かせて感じとっている先生の姿。何よりも、学年末に、生徒たちが口々に愚痴(?)を言うのを許すような、生徒に開かれた寛容的な雰囲気をもっておられたということ。勉強を楽しく教えてくれる「だけ」の先生も、厳しい「だけ」の先生も、やさしい「だけ」の先生も、話をよく聞いてくれる「だけ」の先生も、もしかすると子どもたちにとっては、どこか物足りない先生なのかもしれません。先生の仕事は多面的です。それは単に、学習指導も進路指導も生徒指導も生活指導も、といった意味での多面性だけではなく、状況に応じて、時機に応じて、子どもたちとの関わりの中で、例えば、厳しさが前面に出ているときでも、その背後に、やさしさも寛容さも同時に脈打っているというような意味での多面性でもあるのです。こうした子どもたちへの関わり方の振れ幅を、十分に自覚的にもてること、これもまた、先生としてのあり方に深みを与えてくれることの一つであるように思えるのです。



■ みなさんに伝えたいことは山ほどあります (3)

教職アドバイザー 細谷 徹一・西寺 正

教職を目指す学生は、2年生から本格的な準備を進めるようにしてください。もちろん授業を大切に。教育現場にボランティアなどで学ぶことも大切。それに加えて、教職支援センターの活用も大事だね。

生徒との距離感をつかむことのむずかしさを知った5日間

— インターンシップを終えて —

文学科 第3学年 井関 翔太

■ 目的：

① 教育現場の様子を肌で感じ取る。

② 教師の視点で物事を見る。

■ 教師として大切なこと：

① 知識を教え込むのではなく、生徒自身の活動の場をつくる。

② あらゆる場面で臨機応変に対応する力をもつ。

継続して
図書ボランティア
として生徒と
かかわる

私は、インターンシップを行うに当たって二つの目的がありました。それは、「現場の様子や雰囲気を肌で感じる」と「授業を行う側の視点でものを見る」ということです。

実際、現場で働かされている教員の方々の授業の様子や、その他の業務等を見させていただいたり、体験させてもらえたりした中で、教育現場の雰囲気というのはつかんだつもりですが、そこに馴染むには一週間では短すぎるというのが正直なところでした。少なくとも、一ヵ月程度はかかるのではないかとというのが私の感想です。

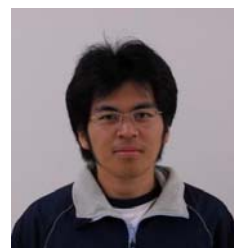
授業の面においては、様々な科目を見聞きさせていただきました。各教科異なった独自性が見られました。私は国語科教員を志望しており、国語の授業を特に気を付けて見ました。この学校での国語の授業の具体的な内容としては、5分間の漢字テスト・CDによる通読・授業の感想文・リレー小説等を行っておられ、授業の中に生徒の活動を多く取り入れられている場面を見ることができました。さらに英語科の授業では、各教室に設置してあるPC接続可能なTVを用いて、リスニングを主にした授業を展開されていました。ただ単に、教員が知識を教え込むのではなく、生徒自身がどれだけ授業の中で活動できるかが肝心だということがよく分かりました。

さて、授業ばかり見ていたわけではありません。中学校生活では注目すべきポイントである、部活動やホームルーム等も見ていただきました。

私は、中・高の経験を生かして、ソフトテニス部を担当したのですが、部員全員が女子であることや一人一人の能力が異なることに、若干戸惑いを覚えました。顧問には、「もっと踏み込んでいい」と忠告されたり、生徒からは、「もっと何か言ってよ」と言われたりしました。私としては「こんなところで負けてたまるか」という気持ちで何とかやりきりました。しかし、指導というよりは、部活動に参加したと言った方が合っているかもしれません。

次に、ホームルームです。終学活には毎日出せさせていただきました。最終日だけは、朝のホームルームに行くことになりました。担任の先生に「訓話を何か話してください」といわれました。驚きと嬉しさが半々でしたが、焦りました。あらゆることに臨機応変に対応するのが教員の仕事でもあることは承知していましたが、あの時ばかりは本当にどうしようかと思いました。結局、最終日だったので別れの挨拶でしめることになりました。

今回のインターンシップにおいて、教職に対する熱意や理解がとて深まりました。何と言っても、実際現場に直接行ける機会というのは貴重なもので、これも、学校側からの受け入れが無ければ成しえないものです。研修は終わってしまいましたが、今後、図書ボランティアとして、この中学校と関わっていくことができるので、より教師としての力量をつけていきたいと思っています。



教師になるために「自分流の参考書」をつくろう！

～ 充実した学校ボランティア活動をめざして～

教育・心理学科 第1学年 稲葉真希人

私は6月から京都市立紫野小学校で学校ボランティアをしています。1年生のうちから実際の学校現場に出て、子どもと関わってみたいと思ったことが、ボランティアを始めたきっかけです。

週に1～3日のペースでボランティアに行かせてもらっています。主に3年生のクラスに学習アシスタントとして入ったり、クラスにいる特別に支援のいる子どものサポートをしたりすることが私の仕事です。ボランティア初日は、「何をやるのだろうか」「自分にはできるのだろうか」という不安もありましたが、そのような不安はボランティア初日になくなりました。それは、紫野小学校の先生方や子どもたちが温かく受け入れてくれたからです。

教育ボランティアを通して私は本当にたくさんの「気づき」や「学び」を得ることができています。その中でも特に「教育ボランティアをしてよかった」と思うことを二つ

紹介したいと思います。

まず一つ目は、ボランティア体験が「自分自身を見つめ直すきっかけ」になっているということです。「自分は本当に教師に向いているのか」

「どうして教師になりたいのか」を改めて考えさせられる場になっています。ボランティアという立場であっても、子どもたちから見れば学校にいる自分より年上な人はみんな「先生」です。実際に子どもに「先生」と呼ばれてみて、「先生としてみられている自分」というものを意識するようになりました。先生と言われることは嬉しいですが、それだけ責任ある目を持たなければなりません。私の四年間での目標は、責任ある目（教師目線）で子どもを見る目になることです。そのためにはボランティアをしながら、大学の授業で学ぶこともより確かなものにしていこうと思っています。

二つ目は、子どもとともに自分自身も成長できているということです。ボランティアでは、子どもに教えること以上に、子どもから教えられることの方が多いと感じています。

責任ある目 (教師の目)



私の夢は教師になること。絶対！

— 充実の5日間・インターンシップ体験 —

国際文化学科 第3学年 保杉 香奈



私は9月13日から17日までの5日間、教職のインターンシップで衣笠中学校に行かせていただきました。このインターンシップは、教育実習への準備段階のひとつです。また、今行かせていただいているボランティアで学んだことを十分に発揮したいという目標をもって取り組みました。5日間という期間は本当に短いので1日も無駄にしたいくない、学べる事は全部学んで帰りたいという気持ちでいっぱいでした。

この5日間、全学年の英語の授業に入らせていただきました。このように3学年を同時に見ることは初めてだったため、学年ごとの学習内容を比較することの出来るよい機会になりました。また、教頭先生に「他教科の授業からも学ぶことも多いので、英語以外の授業を見学してもよい」と言っていたので、多くの授業を見せていただきました。どの先生方も生徒の興味を引くようなユーモア溢れる授業をされていました。

この5日間、沢山のことを学ばせていただき貴重な体験をすることが出来ました。そして短い期間の中に多くの生徒と先生との出会いがありました。感受性が豊かで傷つきやすく、心も体も大きく成長している生徒との出会いがありました。生徒の人生のほんの一部分にすぎませんが、そのような大事な時期に関

われることが出来て本当に嬉しかったです。授業、部活動、合唱コンクールの練習、休み時間、さまざまな面から感動や勇気、楽しさを貰いました。先生との出会いで最も心に残ったことは、部活動の顧問の先生の励ましや生徒に向かう姿勢でした。部活動終了後のミーティングで、キャプテンの責任の重さやキャプテンを支える部員の在り方について、自分の経験を踏まえながら、生徒の心に響くお話をされました。特に「あなたたちに出会ったことは私の財産や」という言葉に先生の熱い思いが生徒に伝わり、全員感涙していました。私は中学校・高等学校とソフトボール部に所属していたこともあって、その時代の様々な思い出が湧き上がり、私の心も大きく揺すぶられ、思わず涙がでました。

また、多くの先生から、教師の大変さや厳しさ難しさも教わりました。それ以上に教師の素晴らしさを実際に見せ付けられもしました。優しくもあり厳しくもあり、どの生徒に対しても熱い情熱をもって生徒に深い愛情を注がれている姿を見て、「私も絶対に教師になりたい」そう強く感じさせられる5日間となりました。

いつの日か教師になって、このインターンシップでの出会いや経験から学んだ様々な力を発揮したいと考えています。

これからの予定

● 教員希望者対象「卒業生の実践報告会」

— 先輩からのアドバイス —

- ➡ 日時: 2010年12月8日(水) 18:00~19:30
- ➡ 場所: 5号館 5203教室
- ➡ 対象学年: 教職を目指す全学年 ※スーツ着用

■ 教育・心理学科 運動会の様子(2010.10.23)



京都府教員採用選考試験説明会 (2010.11.4)

■ 大谷幼稚園での餅つき(2010.12.3)



知っておきたい教育用語 「PTA」

Parent-Teacher Association (細谷)

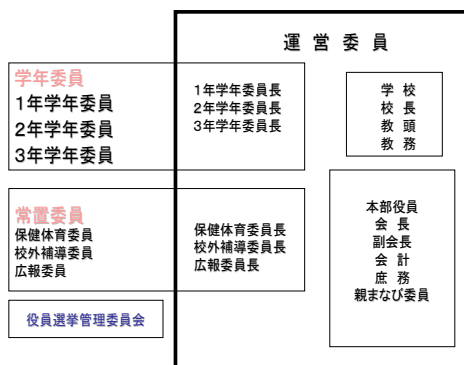
日本のほとんどの学校にはPTA組織がつくられている。本来、名称どおりにとらえれば、保護者と教師が構成する組織である。現状は、保護者の活動が中心になり、学校の校長や教頭などが協力を呼びかけたり助言したりしている。教諭は時間的な制約もあって、あまり参画できないのが現状である。主たる活動は以下のとおりである。

- ① 学校教育活動への組織的な支援や参加
- ② 家庭・地域における子どもの健全育成
- ③ 今日の教育課題についての研修活動
- ④ 会員相互の交流と親睦

PTA活動はその地域によって様々な活動形態がみられる。毎年役員となり手がないことに困っている組織もあれば、学校の財政的な支援を中心に展開している組織もある。また、今日的課題を踏まえ、学校と地域との連携協力を進め、学校支援ボランティア活動の推進や学校運営協議会などを巻き込んだ学校運営への積極的な参画という動きもみられる。今後のPTAのあり方については注目していく必要がある

中学校の例

一般的なPTA組織



英語ノートを 知っていますか？

平成20年3月の小学校学習指導要領の告示によって今、小学校5・6年では、『外国語活動』(年間35時間)が導入されています。



『英語』を原則として取り扱います。写真は文科省が配布している「英語ノート」です。内容は英語を基本としながらもアジアやヨーロッパの言語(あいさつ程度)も紹介されています。

外国語活動の目標は、「言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションをを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養うこと」としていますがこの「英語ノート」では様々な言語活動を提案しています。

英語ノート①や②に準拠したCDなどは京都市教育委員会などのご協力で教職支援センターに集まりました。英語ノートに準拠した教材(絵カード)など、外国語活動に関する情報を文科省のホームページや研究発表会などを通じ、今後、共に勉強していきましょう。(西寺)

読書案内

教育・心理学科 第2学年 谷澤 祐一

「教えるということ」

大村 はま 著 共文社



—私は、自分の幸福感の中に浸ってばかりいないで、きちっと立ち上がって自分の本職は何かという目で、温かいけれども非常にきびしい目で、子どもたち見ることができなければならないと思います。—大村はま

「教師」とはどういう職業なのでしょう。それを目指すために、ボランティアへ行ったり、研究したりします。その途中で自分の非力さや、迷いが生まれることでしょう。そこで一度立ち止まり、歩き出すために「教師」という職業について考えてみてほしいかもしれません。「教師になる」という絶対的信念がある方は、自分の背中を押すためにもいいでしょう。

この本では大村はまの「教師」としての魂や、考え方が伝わってくるものです。大村はまと聞くと「国語」というイメージが強いですが、教科を越えて「教師」という仕事そのものを考えさせてくれる本です。一つ一つの力のある言葉から、大村はまの考える「教師」の姿が伝わってくるでしょう。職業としての教師としての魅力、

困難さ、厳しさ、そしてそれらに打ち勝つ勇気を与えてくれます。

教師としての真の愛情とは、技術とは、仕事の成果とは…

この本は教師を目指す人に是非読んでもらいたい一冊ですが、そうでない人が読んでもととてもおもしろい、価値のある一冊だと思います。

